卯年にかける

傘寿 五月一朗（さつきいちろう）

写真・森幸一ほか　文・おさだ衛

99年には傘寿（さんじゅ。80歳）の祝いを迎える浪曲界の大看板。衰えぬ声量と活気。健康の秘訣を聞いてみた。

「80歳ですか。舞台では年は45歳だと言っているんですがね。ははは。私のうちは長生きの家系で兄弟6人が一人も欠けていません。長男が86歳で、私は三男です」

さつき　いちろう。1919（大正8）年7月7日、香川県志度町うまれ。師匠は初代・廣澤駒蔵。当代きっての大看板だ。

食事は菜食で、月に一度は健康診断を受けている。

「去年の9月、兵庫県で10日間に毎日2席ずつ演りましたら、さすがにこたえましたよ。こりゃ、無理できんなと思いました」

10日間で場所を移動して毎日2席。若いもの顔負けの体力だ。浪曲界の長老として現在の問題は、

「頭痛のタネは、めんぐれ（関西の楽屋用語で出演者が変わらないこと）になっていること。東西交流ができたらお客さんが喜ぶんですがね。費用のことなどか課題があるんですが、大いに交流したいですね。実際、名古屋の大会は地元の名古屋、関西、関東と合同して見ごたえのある舞台が続くんですよ」

芸歴が64年、大ベテランだが新しいネタに次々と挑戦している。

「いいネタが芸人の命です。このネタはお客さまが喜ぶなあと思ったら、一生懸命おぼえますね。それが芸人の本能なんです」

いまは、どんなネタに取り組んでいるのですか。

「松平国十郎さんの『晴れ晴れ雲』を演ろうと考えています。桃中軒雲右衛門を描いた作品でね。私は何度きいても泣けるんですよ。著作権の問題が解決できたら、ぜひ舞台に掛けたいですね」

相三味線の加藤歌恵とは30年もの間、息もピッタリだ。はやく『晴れ晴れ雲』が聞きたいものだ。

昭和21年。初代・京山小圓嬢の一座で。前列中央が小円嬢、後列中央が一朗師。「軍隊がえりで髪はフサフサして女にもモテました。ははは」酒、煙草をやらないのが健康の秘訣だ。

若い浪曲師に望むことは、

「いまも言ったように、いいネタを増やしてほしい。読みこなして稽古して自分のものにしてほしい。芸人であることに徹してほしいんです。いまは昔と違って仕事がないし苦しいけど、それを乗り越えてがんばってほしい。浪曲の灯火を消さないでほしい」

そのためにも師匠も、もうひとふんばりを期待します。

「身体が続く限り、生涯がんばります。勉強します」

ケレンたっぷりの一朗ぶしは浪曲界の偉大な財産だ。師の生涯現役宣言にはこちらから感謝したい。傘寿サンジュー・ベリマッチだ。